

第 23 回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA オンラインアジア大会(動画審査) 総評 ソロアーティスト部門

●審査員 A

音楽に対する皆さんの献身的な姿勢には、本当に頭が下がります。皆さんの人生の中で音楽がとても重要な部分を占めていることが伝わってきます。日々の練習の中で、何が一番大切なのか、悩むこともあるでしょう。ピアノに向かう時間を最重要視することもあれば、いろいろな技術的な練習をすれば、早く上達するのではないかと考えることもあります。また、競争することが目標だと思える日もあります。これらはどれも正しく、また私たちの上達の助けとなるでしょう。しかし「自分は音楽が大好きだから音楽を演奏しているんだ!」という気持ちに勝るものはありません。これから先、ピアノの前に座って音楽を奏でるとき音楽の持つ癒しの力や美しさを感じてほしいと思います。

●審査員 B

第 23 回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA アジア大会に進出された皆様、おめでとうございます! ソロアーティスト部門は、ショパンの傑作を深い芸術性をもって解釈できる成熟した強い個性を持っているかどうかということが試される、特に要求の高い部門です。私の印象では、芸術性よりも技術的な面が勝っていると感じました。まずは全般的な音楽言語に対する理解を深めることをお勧めします。ピアニストは「鍵盤弾き」だけでなく、歌手、指揮者、作曲家、俳優、ダンサー、作家を一手に引き受ける存在です。人間として、解釈を行うものとして、芸術的な課題をもっと意識してください。皆様が充実したピアノ人生を送られるよう、お祈りしています!

●審査員 C

親愛なる参加者の皆様、コンクールでの演奏と、アジア大会への出場権を獲得されたことにお祝い申し上げます。皆さんの演奏をととても楽しく聴かせて頂くとともに、コンクールの準備に費やされた膨大な労力に敬意を払いたいと思います。

アジア大会に参加されたほぼ全員が、非常に高いピアノの技術をお持ちで、綿密に準備されてきたと感じました。皆さんが今後更に芸術的な研鑽を積まれる上で、是非ご検討頂きたい点についていくつか述べたいと思います。

全ての演奏を聴いてまず思ったのは、曲の内容や感情の深さにもっと関わろうとする姿勢が必要であるということです。皆さん素晴らしいピアノテクニックをお持ちですので、作品をより深く掘り下げ、より細部まで解釈し、「自身が作品をどのように理解していて、音楽を通して何を表現したいのか」を示すことができると思います。ただそのためには、ある程度の創造性と芸術的な想像力が必要です。

もうひとつ重要なのは、音質へのこだわりです。特にフォルテの音量で表情豊かなクライマックスを構築しようとするとき、芯のある音で支えなければなりません。これは自然で適切な方法です。しかし、特にショパンの作品においては、それは決して硬くて耳障りな音ではなく、深くて高貴な音でなければならないのです。音に敏感であるということは、その美しさを追求するだけでなく、多様な音色へのこ

だわりと、楽器から様々な音色を引き出そうとすることであり、その結果、異なったアーティキュレーションを使用することになります。ショパンが好んで使ったアーティキュレーションは、レガート・カンタービレでした。もうひとつショパンがよく使ったアーティキュレーションは、レグジェーロです。今回のコンクールにおいて、特に歌うようなノクターン、抒情的なバラード、その他舞曲などで、これらの2つのアーティキュレーションは、あまり聴こえてきませんでした。異なったアーティキュレーションや多彩な音色を弾き分けることは、様々な音の層を生み出すと同時に重要な声部を強調し、それらが適切なバランスで聞こえるようにすることです。全ての音が同じように重要であるということは決してありません。ある音が目標であるならば、他の音はその目標へと導く役割があるのです。

また、自然なアゴーギクについても改善の余地があると思います。音楽の中で時間をどのように使うかということは、表情やクライマックスを作り出したり、作品を自然な語り口（ナレーション）で演奏するためにとっても重要です。ショパンの使った、美しくも難しい「テンポ・ルバート」という言葉には、多くのことが含まれています。もちろん、これは「均等」という意味ではありません。自然に表現するために、より深い呼吸、落ち着き、そして時にはせつちちな「*stretto*（ストレット）」となることもあります。しかし、これらはどれも、一続きの語り口や長いフレーズを崩さずに奏されなければなりません。

もうひとつ、コンクールでの演奏に関連して触れておきたいのは、楽譜を正しく読むということです。まず1つ目は、強弱、アゴーギク、アーティキュレーション記号を直訳しすぎていることです。スタッカートやアクセントをどのように弾くかということは、曲の内容や性格に大きく左右されることを覚えておいてください。ピアノとフォルテの音量では、アクセントの弾き方も変わってきます。また、叙情的なワルツと生き生きとしたオベレクでは、スタッカートの弾き方も変わります。2つ目は、文字通り、楽譜に書かれている音とリズムを正しく読んで弾くということです。音符の読み間違いで和声が大きく変わり、音楽的な意味も変わってしまった演奏がありました。今私たちは多くの版や録音に接することができるので、このような初歩的なミスは簡単に確認することができるはずですが、逆に言うところのこのようなミスは楽譜を表面的にしか読んでいないということを表していると思います。

もちろん、聴衆のいない場所でコンサートの雰囲気もないまま、カメラとマイクに向かって演奏することは、簡単なことではないでしょう。それでもなお、ピアニストの皆さんが「生」で音楽を創る喜びやインスピレーション、そして自分自身の中にある自発性を見出し、自分の音楽的個性を発見できることをお祈りしています。

●審査員 D

昨年来のコロナ渦にもかかわらず、よく勉強され準備されてきた成果を感じました。反面ソロ部門の最高峰の演奏として、以下の点が物足りなかったです。

先ず昨年も指摘した事ですが、今回も動画クオリティーが低すぎる方が多く見受けられました。これは画質の問題ではなくて勿論音質面です。録画を後でチェックして他の優秀な YouTube 作品と比較すれば明白ですが、スマホのマイクの使い方が分かっておられません。スマホの録音は基本オートレベルなので音源から近ければ当然レベルオーバーになりリミッターが働きます。つまりグランドピアノのような

パワフルな楽器を至近距離で録れば、当然悲惨な録音になる事はソロアーティスト部門くらいのハイレベルな参加者なら想像して欲しいのです。これ以上は書きませんが演奏にとって音は命です。

次に演奏に少し自由さが足りない気がしました。よく言えばきちんと弾けている、逆に言えば少しペダントニックで退屈な演奏もありました。ショパンの作品の演奏には和声や対位法を含めたあらゆるアナリーゼ面での準備は当然必要ですが最後に演奏となって生きた音になる瞬間にはその場の心の動きや意外性等、即興的な要素も又重要になります。全ての事前準備はさり気なく、そして本番では自身の魂の叫びを何よりも大切に。

●審査員 E

全体的にピアノ演奏に対する熱意の伝わる演奏でした。その中で、作品に対する一層深いアプローチと、自分の音・音楽を聴く力が必要であると感じました。単に表面的な形を整えるだけではなく、楽譜に書かれた基本的な情報を常に見つめ、それらをどのように演奏に反映させていったら良いのかを考え、感じ、音楽を構成して、さらにそれが実際にできているか試行錯誤しながら、自分の言葉になるまで多角的にアプローチをしていきましょう。自身の思いが果たして実際の音に反映されているか、客観的な耳を持って演奏することとは、これから演奏を続けていく上でとても大切なことと思います。

●審査員 F

- ・テクニックも良く、きちんと弾いていらっしゃるので、強い所も音楽の広がりがもっとあると良いと思います。
- ・ピアノのタイプか録音の仕方に変化するのだと思いますが、左右の強さのバランス・響きすぎで惜しい方もいました。